

広見線の变迁

●東美鉄道の設立

「広見—多治見」間が国へ買収されたのち、今度は名古屋鉄道によって、犬山から今渡(可児市)を結ぶ「今渡線」が開通、また、広見を経て八百津へ至る路線を申請中であることに加え、大同電力(現関西電力)が発電所建設の資材搬入のため、「古井(現美濃加茂市)—八百津」間の路線を申請していたこともあって、国はこの2社と東濃鉄道の間で調整をおこない、新たに「東美鉄道株式会社」を設立することとなりました。

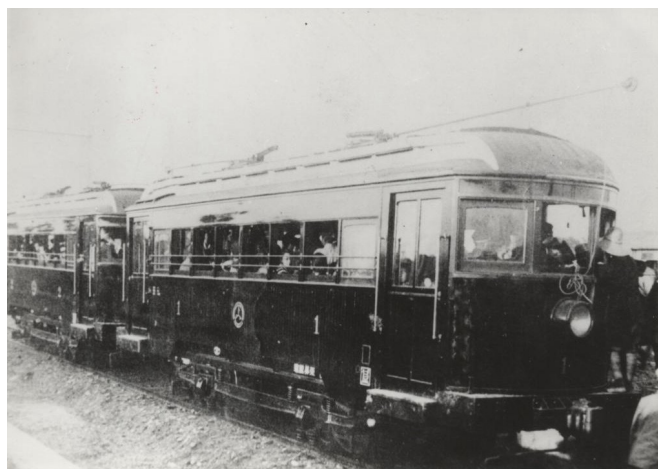
新しく生まれ変わった「東美鉄道」は、本社を「御嵩駅(御嵩口駅)」に置き、電化や軌道を拡幅して、昭和3年(1928)に営業を開始しました。

●名古屋鉄道への合併と広見線の今後

蒸気機関車が走っていた「東濃鉄道」の頃は、列車本数も少なく貨物も線路がせまいため多治見で積み替えでしたが、それでも可児郡では唯一の公共交通機関として業績をあげていました。

さらに電化した「東美鉄道」になってからは、輸送力は高まったものの、バスやトラックの進出、経済の不振などで思ったような業績はあがりませんでした。昭和のはじめ頃から御嵩の亜炭産出が増大したことで業績が回復しました。そして、太平洋戦争がはじまると交通機関の統合と強化が求められ、昭和17年(1942)に名古屋鉄道と東美鉄道が合併し、現在へと至っています。

中央本線の敷設から「御嵩に鉄道を！」という地元の熱意にはじまり、資金の不足、そして合併など、多難を極めた鉄道の歴史ですが、地域の公共交通機関として、人はもちろん物資や情報などを100年以上にわたって輸送し続けてきた現在の広見線。その歴史には、人々の鉄道に対する強い想いと努力がありました。そしてこれからも地域の公共的な交通機関として、必要とされる存在なのではないでしょうか…。



東美鉄道1号車両(昭和3年ころ)